

いのちと自然を
守り育てる

価値ある製品を創り、社会課題の解決へ

古来、人のいのちを支えてきた「農業」。

私たちクミアイ化学工業は、国産第一号の農薬を市場に提供して以来、安全で効果的な農薬の研究開発・普及を図ることで、人と自然の調和が織りなす豊かな実りを守ってきました。

日本での小さな一歩から始まった私たちは、グローバル規模での食料の安定確保という課題に直面し、世界に向けて大きく踏み出しています。

農薬の創製から製造・販売に至る一体化したプロセスにより、さらなる研究の精度と製品の品質向上を目指して人類共通の食料問題解決への挑戦を続けてまいります。

さらに、2017年5月のイハラケミカル工業との経営統合により化成品事業も加わり、人の暮らしを豊かにする製品・サービスの提供にも努めてまいります。

— 企業理念 —

私たちは創造する科学を通じて「いのちと自然を守り育てる」ことをメインテーマとし、安全・安心で豊かな社会の実現に貢献します。

— 経営ビジョン —

1. 常に世界に目を向け、世界市場でリーダーシップをとるグローバル企業を目指す
2. 常に新しい価値を創造し、顧客のニーズと信頼にこたえる
3. 常に高い目標に挑戦し、活力溢れスピード感ある人間集団を形成する
4. 常に透明性ある企業活動を通じ、全てのステークホルダーとの調和を図る

— ステークホルダーとの関わり —



編集方針

はじめに

「クミアイ化学工業CSRレポート2018」は、「いのちと自然を守り育てる」ことを目指す当社のCSRの考え方や課題、目指す方向性および取り組みの進捗をステークホルダーの皆さまにご理解いただくことを目的に発行しました。

本レポートの基本的な構成としてISO26000の中核主題に沿った形で取り組みを掲載しています。またCSRの取り組みとSDGs（持続可能な開発目標）の関連性も示す報告となっています。

当社の本業である農薬の製造・販売を通じて社会課題の解決に取り組んでいく方針と現在の取り組み状況を報告する趣意で、「安全・安心への取り組み」と「環境保全型農薬の開発」の二つの特集を組みました。

安全・安心な農作物を消費者の皆さまにご提供するためには、農薬を購入・使用する農家の皆さまに農薬を適正に使用していただくことが重要であると考えており、「消費者課題」で農薬の適正使用に関する情報・技術の提供活動について記載しています。

本レポートは、当社が作成、発行する最初のCSRレポートです。今後、ステークホルダーの皆さまからいただくさまざまなご意見を十分に活かしながら、継続的なCSRの取り組みの向上につなげていくとともに、本レポートの充実も図っていきます。

【報告対象期間】

2017年11月～2018年10月の取り組みを中心に、左記期間外の活動についても一部報告しています。「人権と労働慣行」と「安全・環境」の項では過去5年間のデータを掲載していますが、各年度の算定期間・時期は当該項目の注記を参照下さい。

【報告対象範囲】

クミアイ化学工業株式会社

【発行時期】

2019年1月(次号2020年1月予定)

【参考ガイドライン】

- ISO26000（社会的責任の国際規格）
- GRI「サステナビリティ・レポート・ガイドライン」第4版
- 環境省「環境報告ガイドライン2018年版」

※報告書の記述について

本レポートには過去と現在の記述だけでなく、発行時点における計画や将来の見通しを含んでいます。これらは記述の時点で入手できた情報に基づく仮定や判断に基づくものであり、将来の活動や結果が掲載内容と異なる可能性があります。

【SDGsに関する取り組み】

当社は2015年9月に国連で採択された「持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals：SDGs）」の達成に向け、事業活動を通じ社会課題の解決に貢献しています。当社は今後も、「いのちと自然を守り育てる」ことを目指し、従業員一人ひとりが日々の取り組みにおいて、SDGsの達成に向け寄与していきます。

Contents

- トップメッセージ……………3
- クミアイ化学工業の事業活動マップ……………5
- 特集1** 安全・安心への取り組み……………7
- Global Column** 世界の食料安定生産に貢献する…8
- 特集2** 環境保全型農薬の開発……………9
- 組織統治……………12
- 人権と労働慣行……………13
- 公正な事業慣行……………14
- 安全・環境……………15
- 消費者課題……………17
- コミュニティへの参画・発展…18

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

世界を変えるための17の目標



トップメッセージ



「いのちと自然を守り育てる」理念をもとに 事業活動とCSRの関連性を再認識し、 持続可能な社会づくりに貢献します。

当社のCSR活動への取り組みについてお話しする前に、慎んで申し上げたいことがございます。

この度の西日本の豪雨災害および北海道胆振東部地震により亡くなられた方々にお悔やみ申し上げますとともに、甚大な被害を受けられた皆さまにお見舞い申し上げます。また、今年は、他の地域でも多くの自然災害が発生しましたが、皆さまの安全と、被災された地域の一刻も早い復旧・復興を心よりお祈り申し上げます。

クミアイ化学工業がCSR活動をどのように捉えているかについてお聞かせください。

当社は、「私たちは創造する科学を通じて『いのちと自然を守り育てる』ことをメインテーマとし、安全・安心

で豊かな社会の実現に貢献します。」という企業理念のもとに事業を展開しています。この理念こそが、当社が事業を通じてCSRに取り組む姿勢を表現したものであり、メーカーとして果たすべき使命にほかなりません。

当社が開発・製造・販売している農業は、安定した食料の供給・増産や環境の保全といった社会課題の解決にストレートに結びつく製品です。しかし、そうした事業とCSRとの関わりについて、経営陣を含めて社内における理解と浸透がまだ不十分であったと考えています。このたび70期という節目を迎えたことを機に、事業を通じて社会に新たな価値を提供する「攻めのCSR活動」とともに、コンプライアンスやガバナンス、リスクマネジメントといった「守りのCSR活動」の重要性を再

確認するために、初めてCSRレポートを作成しました。このレポートによりお客様や株主・投資家の皆さま、そして従業員一人ひとりに対して情報を発信し、当社のCSR活動を再認識することが、次のステップに繋がると考えています。

事業活動を通じた攻めのCSR活動について具体的に説明ください。

農業の機能向上は、農作業の効率化を推進する上で、大きな役割を果たしてきました。当社は、高齢化が進む農家の除草作業を省力化するために、従来の農業より簡単に散布可能で飛散（ドリフト）を抑えた豆つぶ®剤の開発・普及に努めています（詳細はP9-11参照）。除草剤が使用される前に人力で除草していたときは、水田10アール当たりの除草作業に年間延べ50時間程度かかっていましたが、今は2時間以下と言われています。今後は、産業用ドローンやAIなどの先端技術を活用した農作業の軽減、省力化がさらに進むでしょう。いま、当社が出資しているドローンメーカーとともに、作物の生育状況に合わせて農業や肥料の量を最適化する「空からの精密農業」の開発を進めています。

また、環境に配慮した製品として力を注いでいるのが、「エコショット®」、「エコホープ®」などの微生物農薬です。これは、自然界に存在する微生物を利用して作物の病気を防除する農薬で、安全性の高い環境保全型農業に適しています。こうした農業の進化による新たな価値の提供は、農業の成長と安定に貢献してきた大きな力であり、当社の事業を通じたCSR活動そのものなのです。

守りのCSR活動において注力されている点をご説明ください。

昨今、企業の品質偽装やガバナンスの機能不全による



不祥事が度々報道されています。こうした問題が起きないように生産部門から独立した品質管理を行う部門を設置したり、コンプライアンス委員会などを設置して社内体制の整備に努めています。しかし、まだまだやるべきことは残っています。法令遵守などに対応するための業務体制づくりだけでなく、いつでもSOSを発せられる、困ったときに相談できるような、従業員を孤立させない職場環境や体制を整えることが大切です。組織単位ではなく、従業員一人ひとりに寄り添ったコンプライアンス体制こそが、意識を変え、不祥事を防ぐ最善の手段といえるでしょう。

働き方改革として各種制度の充実を図っていますが、時差出勤の導入なども検討し、働きやすい環境づくりを進めております。また、働きがいを高めることにも注力し、仕事を通して自己実現ができるように、「存在感」、「達成感」、「将来への希望」を持つことの大切さを機会があるたびに従業員に説いて意識改革を促すとともに、その体制づくりにも努めております。クミアイ化学工業で働いて良かったという従業員の満足度を高めることが、守りのCSR活動の基盤になると私は考えています。

今後のCSR活動において、取り組むべき課題とはどんなことでしょうか。

今回のレポート作成は、当社がCSRという視点で自らの事業を見つめ直す第一歩です。国内農業の発展・成熟とともに歩んできた歴史、ODAに協力して開発途上国の農業を支援した経験など、私たちの事業は社会課題の解決と深く結びついています。農業はもとより、ブランドが表に出ない化成品事業においても社会に提供しているさまざまな価値を捉え直す作業が必要です。この数年で官民、そして国内・海外ともに広がりを見せているSDGs（持続可能な開発目標）と事業の関連性を考慮しながら、当社のマテリアリティ（重点課題）を特定することがCSR活動における次のステップだと認識しています。海外事業における現地農業への貢献や静岡県で行っている棚田の支援など、今回お伝えしきれなかった部分については、次回のレポートで改めてご紹介する予定です。

ステークホルダーの皆さまにおかれましては、このレポートをご一読いただきまして、ご意見やご指摘、私どもに期待される点などがございましたら、ぜひお聞かせください。今後とも変わらぬご支援、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

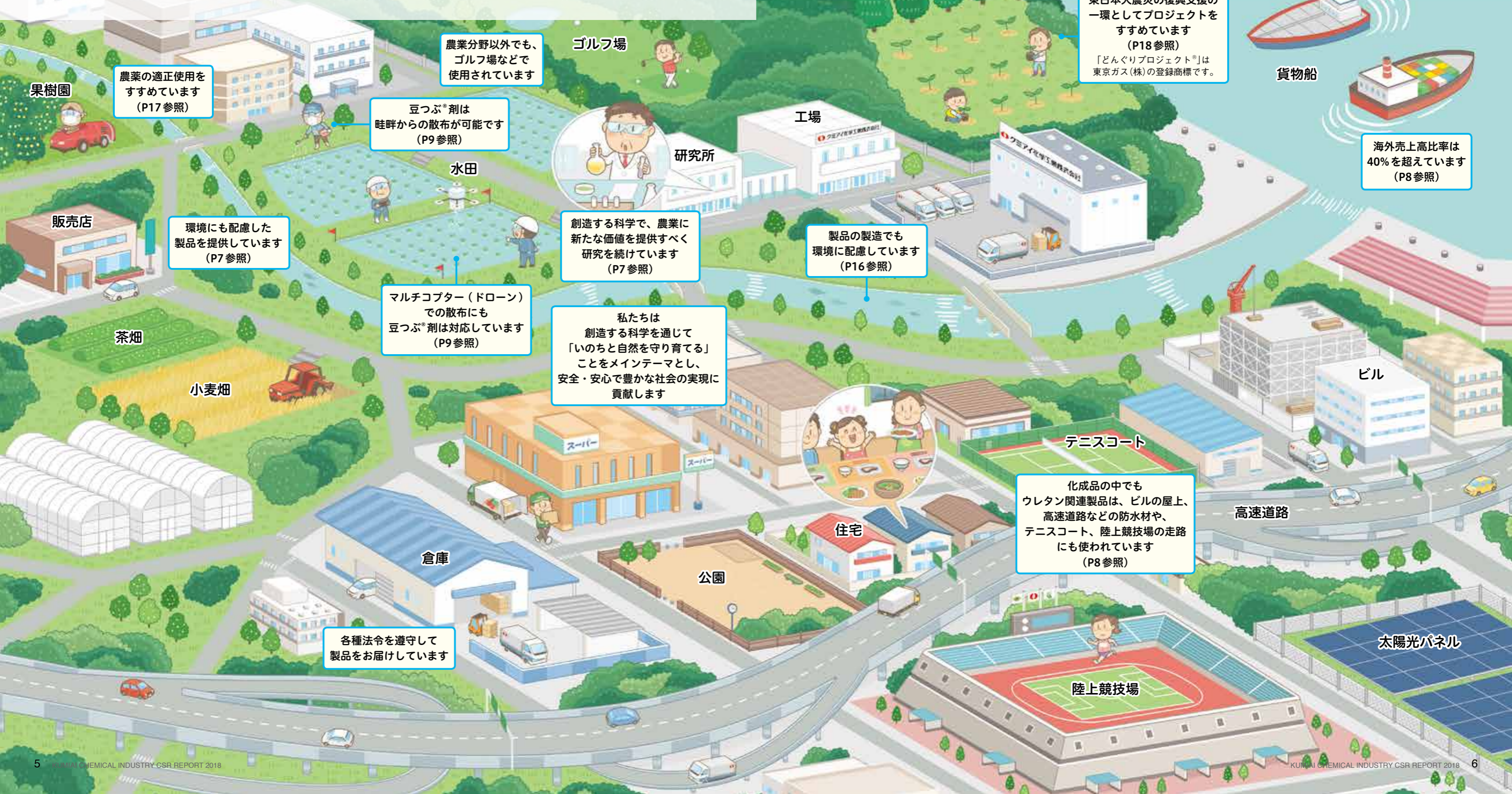
代表取締役社長

小池好智

クミアイ化学工業の事業活動マップ

自然と調和し、人の暮らしを支える クミアイ化学工業

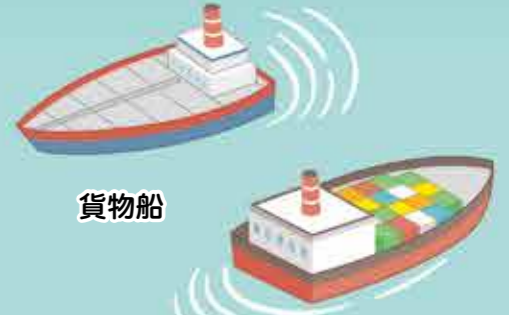
クミアイ化学工業の製品は、人々の暮らしと深く関わっています。
穀物や野菜、果物など農作物の育りに欠かせない農薬は、毎日の安全・安心でおいしい食生活を支える製品です。
また農薬以外の化成品は、生活のさまざまな場面で利用する社会インフラに活用されています。
クミアイ化学工業のCSRは、いのちと自然を守り育てる、私たちの事業活動そのものと言えます。



静岡県菊川市の「せんがまち棚田」の保全活動を支援しています

公正な事業慣行に従い、世界中から原料・資材を調達しています (P14参照)

どんぐりプロジェクト®
東日本大震災の復興支援の一環としてプロジェクトをすすめています (P18参照)
「どんぐりプロジェクト®」は東京ガス(株)の登録商標です。



海外売上高比率は40%を超えています (P8参照)

果樹園
農薬の適正使用をすすめています (P17参照)

農業分野以外でも、ゴルフ場などで使用されています

豆つぶ®剤は畦畔からの散布が可能です (P9参照)

販売店
環境にも配慮した製品を提供しています (P7参照)

研究所
創造する科学で、農業に新たな価値を提供すべく研究を続けています (P7参照)

工場
製品の製造でも環境に配慮しています (P16参照)

マルチコプター(ドローン)での散布にも豆つぶ®剤は対応しています (P9参照)

私たちは創造する科学を通じて「いのちと自然を守り育てる」ことをメインテーマとし、安全・安心で豊かな社会の実現に貢献します

テニスコート
化成品の中でもウレタン関連製品は、ビルの屋上、高速道路などの防水材や、テニスコート、陸上競技場の走路にも使われています (P8参照)

倉庫
各種法令を遵守して製品をお届けしています

安全・安心への取り組み 創造する科学で、 農業に新たな価値を

クミアイ化学工業の製品づくりにおける第一優先は、使用する農家の方々、消費者、作物、環境にとって「安全・安心」であること。安全・安心をテーマとした製品開発への取り組みを紹介します。

安全で環境にやさしい微生物農薬 「クミカエコシリーズ®」の開発を推進

私たちクミアイ化学工業は、消費者が求める安全・安心な農作物の生産を目指す農家の皆さまのため、微生物農薬「クミカエコシリーズ®」の継続的な開発と品揃えの充実を進めています。



微生物農薬とは、自然界に存在する細菌や糸状菌などから利用可能なものを見つけ出し、独自の培養技術や製剤技術を駆使して、農薬としての機能を磨き上げたものです。

当社が初の微生物農薬として水稻種子消毒剤「エコホープ®」を販売したのは2003年のことでした。その後、「エコホープ®」を常温保存可能にし、適用病害の拡大と効果安定性の向上を実現した「エコホープ®DJ」、果実に対する汚れが極めて少なく、保存性に優れた園芸殺菌剤「エコショット®」を商品化し、さらに「エコマスター®BT」をラインナップに加え、微生物農薬「クミカエコシリーズ®」の普及推進に努めています。

いま、多くの農家が注目しているのが、化学農薬・化学肥料の使用量を50%以下に減らした特別栽培や環境に配慮したIPM（総合的病害虫・雑草管理）です。当社の「クミカエコシリーズ®」は有効成分にカウントされない、有機農産物の日本農林規格（JAS）に適合した薬剤であるため、特別栽培やIPMを実践する農家から支持されています。今後も新たな「クミカエコシリーズ®」の開発を進めて、消費者が求める安全・安心な農産物の生産に貢献していきます。

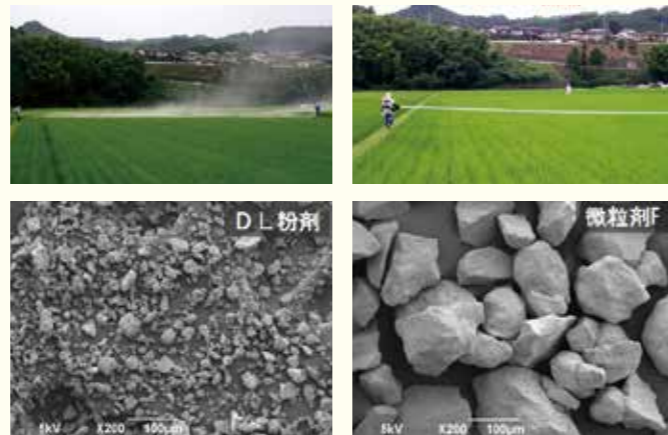
農薬を撒く防除作業者と周辺作物を ドリフトから守る微粒剤Fを実用化

農薬散布時の薬剤ドリフト（飛散）に伴う防除作業者への曝露リスクや周辺作物における残留リスクを軽減するため、私たちクミアイ化学工業は、風の影響を受けにくく、圃場周辺環境へのドリフトが少ない製剤技術（豆つぶ®剤、微粒剤Fなど）の開発を進めてきました。

その一つである微粒剤Fは、粉剤に比べて粒径を4～5

倍に大きくすることでドリフトを大幅に軽減した剤型です。1970年代に考案され、優れた低飛散性で注目されましたが、製造が容易で安価なDL粉剤に需要がシフトし、使われなくなっていました。しかし、2006年に農薬の残留基準を定めたポジティブリスト制度導入により、各地で農薬散布時の飛散防止対策が求められ、低飛散性の微粒剤Fが再び注目されたのです。私たちも2006年10月に一般社団法人日本植物防疫協会が事務局となって発足した微粒剤F協議会に参画し、微粒剤Fの早期実用化を目指して開発に取り組みました。その結果、2008年6月に新生微粒剤F第1号として「サジェスト®微粒剤F」の登録を取得しました。続いて、2009年に「ビーム™スタークル®微粒剤F」、2012年に「キラップ®微粒剤F」の登録を取得し、現在もこれら3剤を継続して販売しています。

微粒剤Fは、他の作物が近接している水田や住宅地に面した水田で使用され、防除作業者の安全確保とドリフトの低減に高い評価を得ています。環境負荷の低減と安全・安心に応えることは私たちの重要な課題であり、今後もその実現に向けた技術開発を進めていきます。



左が従来のDL粉剤、右がサジェスト®微粒剤F

TM：ザ・ダウ・ケミカル・カンパニーまたはその関連会社商標
スタークル®は三井化学アグロ株式会社の登録商標です。
キラップ®はバイエルグループの登録商標です。



新たな評価系を構築し、 人と環境にやさしい農薬の創製を目指す

国内で使用される全ての農薬は、「農家」「作物」「消費者」「環境」という4つの見地からさまざまな試験を行い、基準をクリアして安全性を認められたうえで国の農薬登録を受けなければなりません。

近年、研究の進歩や技術が発展するスピードが加速するなか、クミアイ化学工業は、安全性の高い農薬の効率的創製をテーマとして、将来的に役に立つことが期待される新しい安全性評価研究を精力的に進めています。たとえば、*in silico*（イン・シリコ；コンピュータの中）の評価で安全性の高い農薬を選抜する研究や、培養細胞を用いて*in vitro*（イン・ビトロ；試験管の中）で安全性を評価する研究を行っています。こうした取り組みによって、新農薬開発のごく初期段階から人や環境への影響を予測することを目指しており、将来的に、安全性の高い農薬を精度よく見つけ出すことが可能になるかもしれません。今よりももっと人と環境にやさしい農薬の創製を目標に、日々努力を続けています。

第二の柱を生み出す最前線、 農薬製造技術を駆使した化成品事業

クミアイ化学工業は、製品を安定供給するために、安全で環境にやさしい工業的製造方法の研究開発に取り組んできました。その過程で培った製造技術を駆使して、他社農業中間体、建築材料、電子材料など、さまざまな分野のニーズに応える化成品を生産しています。

それらの化成品の中で、最も幅広い分野に利用されている

●農薬開発の流れ

項目	過程	開発段階			登録段階	市販段階
		Phase1	Phase2	Phase3		
探索研究		[Progress Bar]				
薬効薬害試験		[Progress Bar]				
毒性試験		[Progress Bar]				
生体内運命 残留試験			[Progress Bar]			
水産・有用生物 影響試験		[Progress Bar]				
製剤研究など		[Progress Bar]				
特許		[Progress Bar]				生産 販売
登録申請						

出典：農薬工業会

のがウレタン関連製品です。マンションや商業施設などの建造物から高速道路まで、身近な施設の安全性・耐久性・快適性を維持向上するために不可欠な防水材料として使われています。さらに、陸上競技場のトラックやテニスコート、体育館の床材などの建材のほか、ジェットコースターやエスカレーターなど多くの機械で重要部品としての役割を果たしています。また、北米、南米、欧州、アジアなど海外においては製鉄工場や半導体工場、油田など、厳しい使用環境に耐える特殊部品としても高く評価され、実績を重ねてきました。クミアイ化学工業は、化成品事業を農業に次ぐ第二の柱として位置づけ、安全や環境に配慮した付加価値の高い製品を供給していきます。



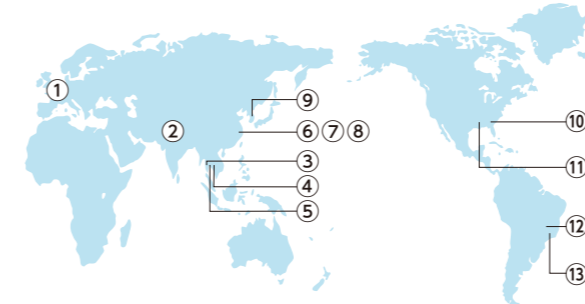
さまざまな分野で色々な重要部品に使われる化成品

Global Column / 世界の食料安定生産に貢献する

日本の少子高齢化が進む一方で、世界の人口は現在の73億人から2050年には98億人まで増加すると予想されています。いま、世界では途上国を中心に8億1,500万人が慢性的な栄養不良状態にあると報告されており、農業の生産性向上は人類の重要な課題です。クミアイ化学工業

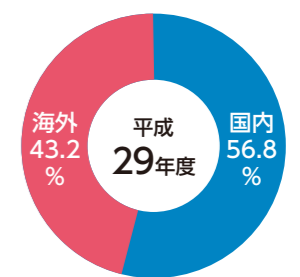
は、SDGsに掲げられた食料の安定確保と持続可能な農業の推進に貢献するために、積極的な海外展開を図り、世界約50ヶ国で水稲用除草剤や畑作用除草剤を中心とした自社開発農薬を提供しています。

●当社グループの海外拠点



- ① K-I Chemical Europe SA/NV (ベルギー)
- ② PI Kumiai Private Ltd. (インド)
- ③ T.J.C. Chemical Co., Ltd. (タイ)
- ④ Bangkok Rep. Office (タイ)
- ⑤ Iharanikkei Chemical (Thailand) Co., Ltd. (タイ)
- ⑥ Shanghai Qunli Chemical Co., Ltd. (中国)
- ⑦ Kumiai Chemical Shanghai Co., Ltd. (中国)
- ⑧ Shanghai Liaison Office (中国)
- ⑨ Kumika Korea Co., Ltd. (韓国)
- ⑩ K-I Chemical U.S.A. Inc. (米国)
- ⑪ Mississippi Research Station (米国)
- ⑫ Iharabras S.A. Industrias Quimicas (ブラジル)
- ⑬ K-I Chemical do Brasil Ltda. (ブラジル)

●海外売上高比率



⑬はクミアイ化学工業株式会社の登録商標です。

環境保全型農薬の開発

人と環境にやさしい 豆つぶ® 剤が貢献する 新しい農業の形

高齢化する農家の農薬散布作業を軽減するために生まれた豆つぶ® 剤。

その歩みと農業の未来に果たす役割について、開発に携わってきた4人のメンバーに語ってもらいました。



花井 涼
生産資材本部 生産部長
豆つぶ® 剤発売当初には、技術普及部門の担当として営業的な役割を果たした。生物科学研究所在籍時は、全国各地の圃場で拡散試験を行い、貴重なデータを収集。

池内 利祐
化学研究所 製剤技術研究センター長
製剤技術研究センター（旧・製剤技術研究所）で豆つぶ® 剤に新たな有効成分を含有するための研究に従事。第一世代から第二世代への進化に貢献。

杉村 俊雄
化学研究所 製剤技術研究センター 植物制御剤研究室長
製剤技術研究センター（旧・製剤技術研究所）の藤田茂樹室長（当時）のもと、第二世代の研究開発に関わった。

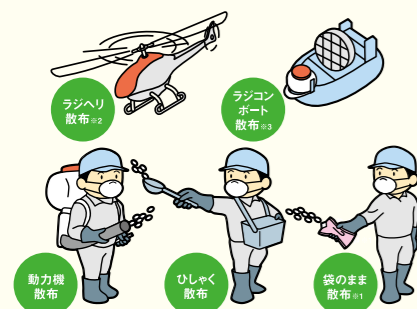
大川 哲生
取締役 研究開発本部 本部長
豆つぶ® 剤の創成期から関わってきたメンバーの一人。豆つぶ® 剤のアイデアを製品の形にして、工場スケールでの量産化対応に取り組んだ。

除草剤の散布作業を省力化し、 薬剤の飛散を防ぐ剤型を開発

1990年代初頭、農家の高齢化が進む中で、除草剤をはじめとする農薬の散布作業をいかに省力化できるかが、大きな課題となっていました。農薬メーカー各社が、従来の粒剤に代わる新しい剤型や散布法の開発に取り組んでいたのは、その課題を解決するためです。その代表的なものとして開発された剤型が、水田に投げ込んで使用するジャンボ剤です。1個あたり25g～50gの重量で水溶性フィルムに包まれたジャンボ剤は、90年代後半までに省力化に有効な除草剤として市場に浸透していました。しかし、ジャンボ剤は散布時に人の手で投げなければならないうえに、水田に浮遊物がある場合は有効成分がうまく拡散しないという弱点がありました。

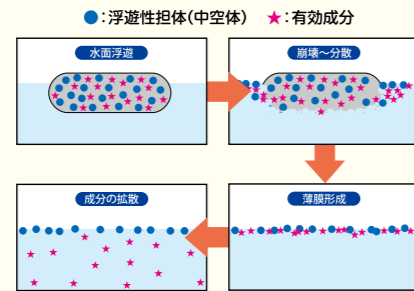
「当時、私たちはジャンボ剤とは異なる剤型の除草剤を模索していました」と語るの、豆つぶ® 剤の開発当初から関わってきた大川哲生（P10写真一番右）です。「高齢者の方が水田に入って、数kgの除草剤を撒いて回るのは重労働ですから、畦から簡単に散布できるものがない。また、省力化だけでなく、近隣作物や周辺環境に影響しないように、風によって農薬が広がるドリフト（飛散）を防止することも開発

●まき方いろいろ



※1:袋のまま散布できない製品もあります。
※2:無人ヘリで散布できない製品もあります。
※3:ラジコンボートで散布できない製品もあります。

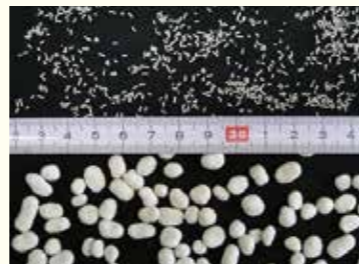
●豆つぶ® 剤の崩壊拡散状態



のコンセプトに加えていました。さらに、散布作業の負荷を減らすためには、農家が既に所有している散布機や無人ヘリを使った散布方法にも適応する剤型であるべきだと考えていたのです。

さまざまな条件を満たすために、悩み抜いてたどり着いた豆つぶ® という剤型。そのヒントは当時、製剤技術研究所（現：製剤技術研究センター）で飼っていたコイの餌が水に浮かんだまま少しずつ広がっていくのを見た担当の藤田研究員（当時）のアイデアであった、と大川は述懐します。

「従来の粒剤の大きさは0.8mm～1.2mmで、水田10アール当たり1～3kgの散布が必要です。豆つぶ® 剤は3mm～8mmで、10アール当たりの散布量はわずか250g。拡散性に優れているため均一に撒く必要もなく、少量の散布で済む豆つぶ® 剤は、それまでの散布方法を大きく変えるものでした。粒剤を1ヘクタールの水田に撒こうとすれば、約1時間かかります。



豆つぶ® 剤と従来の粒剤の比較（拡大図）

でも、豆つぶ® 剤ならたったの10分で済む。水田に入らなくもいいし、散布機や無人ヘリも使えます。一番簡単なのは、

釣具屋さんで売っているコマセを撒くためのヒシャクです。1回でちょうど25g撒けるし、遠くまで飛ばせて便利なんです」。

10年がかりで認められた 優れた省力化と拡散性

「偏った撒き方をしても、水田全体に満遍なく拡散するかどうか、入念に試験を繰り返しましたね」と語るの、当時、中国営業所および企画普及部で開発に関わっていた花井涼（P10



生えている雑草だけでなく雑草の芽も除草

写真一番左)です。「わざわざ水田に入って均一に撒かなくても、拡散して効果が出るのが豆つぶ® 剤の大きなメリット。その製品特性には確信を持っていました。一方でメーカーとしては、どれくらい適当に撒いても大丈夫なのかについて、きちんとデータを取る必要があります。気候や土壌が違って同じ効果を得られるかを検証するために、北海道から九州まで、全国各地の水田に足を運んで試験を行いました。当社にとっても初めて製造する剤型なので、データの蓄積がまったくありません。各地の水田を使い、相当数のデータを取りました」。試験は苦労したが、豆つぶ® 剤の優れた拡散性を実証できた如花井は語ります。

5年以上にわたる開発期間を経て、豆つぶ® 剤の第一世代となる「パットフル®」は、2001年に発売されました。開封したパッケージをそのまま手に持って、水田にひと振りするだけで適量を散布できることから名付けた「ぱつと振る」。しかし、稲作農家は総じて実直・堅実な気質であるがゆえに、保守的な傾向も強く、リスクを嫌うため、新しい除草剤が出たからといってすぐには試していただけない傾向にあります。

「新しい除草剤を使ってみて、もし効かずに雑草が残ってしまうと、収穫に影響します。農家の方々は、前の年に撒いて効果のあった農薬を使いたいの、そう簡単には変えても

られないんです。また、農薬はなるべくたくさん使った方が効くと思っている方も少なくないため、少量でも効果のある豆つぶ® 剤は、撒いた気がしない、本当に効くのかと疑問を感じる農家の声も聞こえてきました」。農業従事者に、それまでの農薬に対する意識を変えさせ、豆つぶ® 剤を使うメリットが認知・浸透するのに10年以上の時間がかかった如花井は振り返ります。

さらにその頃、大きな問題になっていたのが、除草剤に耐性を持つ抵抗性雑草です。初めて開発した豆つぶ® 剤は、拡散性において高い評価を受けた一方で、まだ抵抗性雑草に対応していませんでした。市場で大きなシェアを獲得するには、この問題を解決する必要がありました。そこで、抵抗性雑草に極めて高い効果を示すトップガン豆つぶ® 剤を開発・市場投入することで、豆つぶ® 剤の普及が加速し、豆つぶ® 剤の成長期を迎えました。

一方で、当時農薬の使用量を減らす減農薬栽培に対するニーズが高まりつつあり、更なる飛躍を図るには第二世代の登場を待つ必要があったのです。

扱いの難しい有効成分を豆つぶ® にする 優れた製剤技術で学会から表彰

「それまで4種類入っていた有効成分の効果を、一つでまかなうために選んだのがピリミルスファンという除草剤です。この有効成分を入れて2011年に発売した「ベストパートナー®」から豆つぶ® 剤の第二世代が始まりました。しかし、ピリミルスファンはクセのある扱いにくい成分として知られており、手打蕎麦を打つと同じように、気温や湿度によって品質が変わります。豆つぶ® の形状にして水に浮かんで10分前後で溶解・拡散するようにコントロールするのは、至難の業でしたね」と、製剤技術研究センターの池内利祐（P10写真左から2人目）は苦笑します。



「今後は豆つぶ®剤の多機能化が目標」(花井)

「豆つぶ®剤で社会課題の解決に貢献したい」(池内)

また、豆つぶ®剤の量産化に取り組んできた大川は、競合他社が豆つぶ®剤を製造できないのは、当社の特許を取得していることに加えて、高度な製造技術を必要とするためと言います。

「有効成分の特性を生かして、最適な溶出パターンを得られるように、複数の制御技術を組み合わせたハイブリッドリリース®という新しい技術を投入しました。有効成分によって界面活性剤などの補助剤も変えるので、作り方は大きく違います。既存の製造設備では対応できないために、豆つぶ®製剤用に製造ラインを改良しました。実は今でもより最適なラインの構築を目指して、我々の試行錯誤は続いているんですよ。」

こうした画期的な農業開発の成果は、農業業界や学会からも注目され、その浸透とともに評価を高めていくこととなります。2010年に省力かつドリフト軽減が可能な新規製剤の開発と普及を評価され、「農林水産技術会議会長賞」を受賞しました。「当社が実現した省力化と環境保全に貢献する豆つぶ®剤の製剤技術は、業界はもちろん、学会においても価値あるエポックメイキングと捉えられたのだと思っています」と語るのは第二世代の開発に関わった杉村俊雄 (P10写真右から2人目) です。「2015年には日本農業学会の業績賞 (技術) を受賞しました。農業の有効成分の開発で受賞することはありますが、製剤技術で学会から表彰されるのは非常に稀なことです。開発に携わる身としては光栄で、嬉しい限りです」。



日本農業学会 業績賞 (技術)

**スマート化する未来の農業に合わせて
豆つぶ®剤の機能と形も進化し続ける**

高齢化が進む農家の省力化と環境負荷の低減に貢献する豆

®はクミアイ化学工業株式会社の登録商標です。

つぶ®剤には、「いのちと自然を守り育てる」というクミアイ化学工業の理念が凝縮されています。これから生まれる第三世代の豆つぶ®剤は、どのような価値を農業にもたらすのでしょうか。

「除草剤と殺虫剤、殺菌剤を一度にまとめて撒けるようにすれば、さらに省力化を進めて農業の効率化・コスト削減を推進できます。既存の豆つぶ®剤は、ほとんどが除草剤なので、多機能化が開発目標の一つです」と花井が語ると、大川が語気を強めこう続けます。「これから大きな変革を遂げていく農業のあり方に対して、我々は応えていかなければなりません。持続可能な農業を実現するには、農業は散布方法とセットで考える必要があります。当社はドローンメーカーに出資し、ドローンに搭載可能な農薬散布機の開発に協力しています。今後、IoTやAIを活用したスマート農業へとシフトする中で、豆つぶ®剤も新しい散布方法に合わせて進化していくでしょう。新しい製剤技術が必要になるかもしれません。当社は、それに応えられる確かな技術力を持っています」。

池内が最後に語った「農家の皆さまの役に立つ製品であると同時に、環境や安全といった社会課題の解決に貢献する製品を開発して、未来の農業に貢献するのが、私たち農薬メーカーの使命です」という言葉に、4人の開発者の熱い想いが込められていました。



「農家の方々の省力化と環境保全に貢献する」(杉村)



「農業の進化、発展に応えるのが開発の使命」(大川)

User's Voice



茨城県龍ヶ崎市
稲作農家
岡野 奎木様

最近、豆つぶ®剤を使い始めて、とても満足しています。商品の特徴やメリットについてはホームページにとってもわかりやすい情報が掲載されているので安心して切り替えられました。

既に使用している農家の方のレポートもたくさんアップされているのでそれらを参考にして、除草剤散布の手間を減らすことができました。豆つぶ®剤があることで毎日の農作業がかなり助かっています。



組織統治

クミアイ化学工業は、コーポレートガバナンス (企業統治) 体制の強化・徹底により経営の透明性・健全性の向上に取り組んでいます。公正かつ迅速な意思決定により、お客様や株主様をはじめとするステークホルダーの皆さまの信頼と期待に応え、持続的な企業価値の向上を図ることが目的です。

**業務の適正を確保するための体制
(内部統制システム)に関する基本方針**

クミアイ化学工業は、法令・倫理を遵守し、さらなる業務の適正化と経営の透明性を高めるために、「業務の適正を確保するための体制 (内部統制システム) に関する基本方針」を定め、当社グループにおける経営管理体制の整備・充実を図り、有効な内部統制システムの構築に努めております。

この基本方針では、以下の8つの体制を規定しています。

- ①取締役及び使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制
- ②取締役の職務の執行に係る情報の保存及び管理に関する体制
- ③損失の危険の管理に関する規程その他の体制
- ④取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制
- ⑤当社及びその子会社からなる企業集団における業務の適正を確保するための体制
- ⑥監査役がその職務を補助すべき使用人を置くことを求めた場合における当該使用人に関する事項並びにその使用人に対する監査役の指示の実効性の確保に関する事項
- ⑦取締役及び使用人が監査役に報告するための体制その他の監査役への報告に関する体制
- ⑧その他監査役の監査が実効的に行われることを確保するための体制

内部統制システムを適正に運用するための具体的な業務プロセスに沿った「水準」を示すために、「内部統制システム運用管理規則」を定め、適正な運用を図っています。また、「グループ企業の内部統制システムの整備・運用のためのガイドライン」を定め、大会社ではない主要なグループ企業にも「業務の適正を確保するための体制 (内部統制システム) に関する基本方針」を定めてもらっています。

Voice

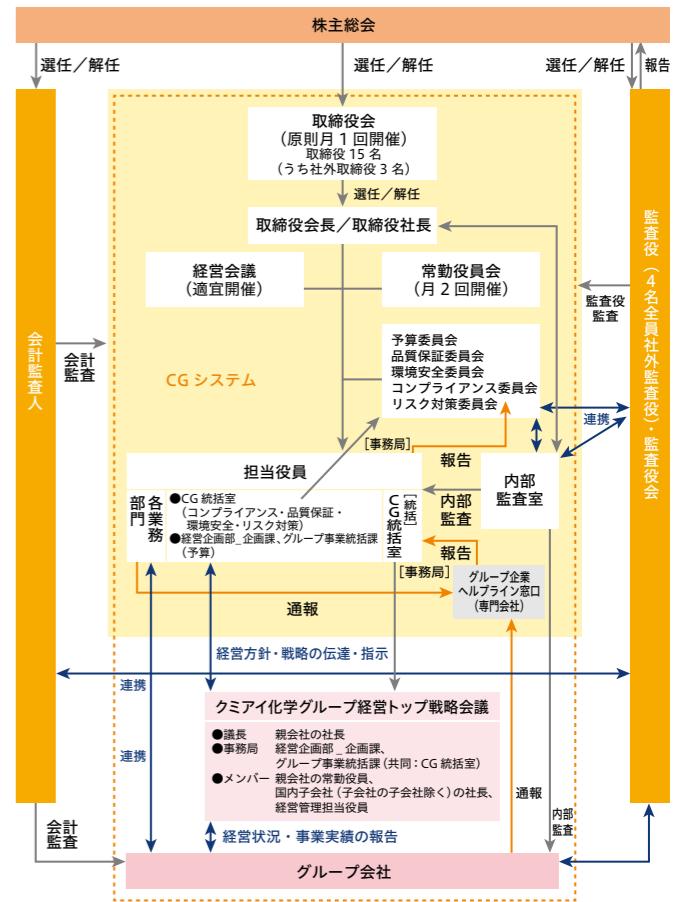


クミアイ化学工業 専務取締役 (コーポレートガバナンス統括室担当)
早川 正人

当社は取締役会、経営会議、常勤役員会を設置しており、それぞれの決定や協議に基づき業務を執行しています。取締役会では、専門分野などのバックグラウンドが異なる社外取締役も積極的に発言し、重要な意思決定を行っています。また経営のチェック機能を強化する観点から社外監査役を選任しています。経営環境の変化に迅速に対応し、持続的に発展できる永続企業を目指すために、法令・倫理の遵守、経営の透明性を高める管理体制の整備、コーポレートガバナンス体制の強化に取り組んでいきます。

コーポレートガバナンス体制図

下記のコーポレートガバナンス体制を構築しています。



財務報告に係る内部統制の基本方針

当社グループは、組織の業務全体に係る財務報告の信頼性を確保し、内部統制の有効かつ効率的な整備・運用及び評価を行うことを目的として「財務報告に係る内部統制の基本方針」を定めています。

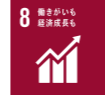
その基本方針に基づいて、有効な内部統制システムを維持・向上させるために、6つの基本的要素 (統制環境、リスク評価と対応、統制活動、情報と伝達、モニタリング、ITへの対応) をバランスよく組み込んだ体制を構築し、日常的モニタリングを通して、内部統制上の問題を適時・適切に報告する仕組みを運用しています。

また、グループ全体における内部統制の整備状況および運用状況を適正に評価するために、事業年度ごとに内部統制評価計画書を策定し、整備および運用状況を評価しています。



人権と労働慣行

クミアイ化学工業は、あらゆる企業活動に際して基本的人権の尊重を第一に考え、雇用や人材の活用において多様性の重視を徹底しています。さらに、ワークライフバランスや社内のコミュニケーションを推進することにより、従業員一人ひとりが働きやすい環境整備に努めています。



人権の尊重

私たちクミアイ化学工業は、企業活動において出生、国籍、人種、民族、信条、宗教、性別、年齢、心身の障害や性的マイノリティなどを理由とした差別を行わず、基本的な人権を尊重することを行動規範に掲げています。

海外で展開する事業においても、世界各地のさまざまな文化や慣習を尊重すると同時に、当社の事業活動を通して現地の発展に貢献すべく努力します。また、児童労働・強制労働などの人権侵害に加担することなく、これらの排除・廃絶に向けた国際的な取り組みを支持し、すべての人々の人権が守られる社会の実現を目指します。

私たちは、企業市民として社会への責任を果たし、より深い信頼を得るために、国際行動規範の尊重など ISO26000



フレッシュズフォロー研修

(社会的責任の国際規格)の視点を踏まえたグローバルな社会的責任の理解と実行のために、従業員の啓発と教育に努め、意識向上を図っています。

ダイバーシティの推進

クミアイ化学工業は、多様な人材が生き生きと働き、能力を最大限に発揮して活躍できる組織風土の醸成や各種制度の整備を通じて、ダイバーシティの推進に積極的に取り組んでいます。当社の人事施策の策定・運用にあたっては、女性の活躍推進、高齢者および外国人の雇用に注力し、一定の成果を上げてきました。多様性を尊重する職場環境は一般社員の働きやすさにも繋がり、新卒入社3年以内の離職率はゼロに近い水準で推移しています。

障害者の雇用においても、職業能力の向上と働きがいを提供する環境づくりに努め、一時的に障害者雇用率が低下した時期もありましたが、現在は、障害者雇用促進法に定められた法定雇用率を維持しています。

●新卒採用者定着状況(3年目までの離職者数)

入社年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度
入社人数	24人	21人	21人	23人	31人
3年目離職者	3人	1人	0人	2人	0人
離職率	12.5%	4.8%	0.0%	8.7%	0.0%

●障害者雇用率の推移

	2014年 6月	2015年 6月	2016年 6月	2017年 6月	2018年 6月
障害者雇用率	2.0%	1.7%	2.1%	1.4%	2.5%
法定雇用率	2.0%	2.0%	2.0%	2.0%	2.2%

ライフスタイルの変化に合わせてワークライフバランスを最適化

クミアイ化学工業は、従業員一人ひとりがライフステージやライフイベントに応じてワークスタイルを選択し、能力を最大限に発揮できる職場づくりを目指し、育児休業制度ほか各種制度および環境整備を進めています。

従業員の働きやすさとワークライフバランスを促す施策として時間短縮勤務を導入し、時差出勤の導入を検討しています。こうした制度整備によって業務の生産性を高め、健康と福祉、働きがいの向上を図っています。

また、福利厚生イベントとして年に一度、本社において開催している「クミカファミリーデー」は、社員の家族が職場を訪問し、当社に対する理解を深める機会として好評を博しています。



「クミカファミリーデー」開催風景

Voice



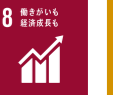
クミアイ化学工業労働組合書記長 阿部 尚司

雇用の安定は生活の基盤です。労働組合として会社と十分な協議を図りながら、雇用と働く場の確保に努めています。従業員が将来にわたってやりがいのある仕事と安全・安心で充実した生活ができるよう、またより良いワークライフバランスを実現させるため、労働環境状況のヒアリングと課題の抽出、その他種々の調査を行い、従業員の意見を積極的に取り入れています。育児や介護と業務の両立にも取り組んでいます。9～17時勤務では働きにくい方のために、時差出勤のテスト運用を始めました。



公正な事業慣行

クミアイ化学工業は、グループ全社で法令や社会規範の遵守を徹底し、公正・誠実な事業活動に取り組んでいます。従業員一人ひとりが倫理的価値観を共有し、お客様の信頼と期待に応えることへの誇りと責任のもとに、取引先の地位や権利を尊重して公正かつ健全な関係性の維持に努めています。



クミアイ化学の行動規範

クミアイ化学工業は、役員および従業員の反道徳的な行動やマナー違反などにより企業の信用、ブランド価値、企業イメージが傷つき、著しく低下するようリスクを防ぐために、「クミアイ化学行動規範」を定めてコンプライアンス基盤の強化に努めています。

企業倫理にとどまらず、国際行動規範の尊重など ISO26000 (社会的責任の国際規格)の視点を踏まえたグローバルな倫理的価値観と責任を理解し、関係するすべてのステークホルダーからの信頼と期待に応えられるよう取り組んでおり、行動規範に則る行動を実行するために、法令、社内規程、各種ガイドライン等に基づき、守るべき事項をまとめた「行動基準」と、行動基準の理解を助けるために、Q & A形式で細かな要点をまとめた「行動基準Q & A」を定めています。加えて、役員および従業員として良識ある行動を行うために、守るべきこと、守ることが望ましいことを具体的にまとめた「倫理基準」を定めています。

独占禁止法・下請法への対応

クミアイ化学工業は、安全で高品質な製品とサービスの提供を喜びとし、誠意をもって公正な販売・購買活動と適切な広報活動を行うことにより、お客様およびお取引先様との Total Win な関係性の構築を目指しています。

お取引先様の地位や権利を尊重し、良識の範囲を超えた過剰な接待・贈答を禁じ、関連法令や公正な商慣習に従って健全な関係を維持します。

国内での販売・購買関連法令では、カルテルや談合などの不当な取引制限、私的独占の禁止、優越的地位の濫用などの不正な取引方法の禁止、事業者団体の活動規制、企業結合の規制等、独占禁止法・下請法の遵守を重視しております。海外でも競争法遵守も意識した公正な販売・購買活動を行っています。

事業活動に関わるサプライチェーンの構築においては、前出の独占禁止法・下請法・競争法遵守はもとより、CSRの推進や国際行動規範の尊重に配慮した適切な事業活動を行うべく、グループ全社に徹底しています。

コンプライアンス教育

クミアイ化学工業は、コンプライアンス体制の強化と企業倫理の浸透を図るため「クミアイ化学行動規範」において、法規範(社内規程類を含む)、社会的規範の尊重、企業倫理等に関する研修を定期的に行うことを定めています。

業務に携わるすべての従業員がクミアイ化学工業の倫理的価値観に基づき行動することにより、強固なコンプライアンス基盤の構築・維持に努めています。

具体的な取り組みとしては、各部門・事業所ごとにコンプライアンス教育計画を作成して実施管理するほか、外部講師を招いて教育講演会を開催し、コンプライアンス意識の向上を図っています。

また、定期的にコンプライアンスに関する意識調査を行い、認識・浸透の度合いについて評価した結果を、教育計画に活かしています。さらに、コンプライアンスについて周知徹底を図るために、チラシやメールマガジンを定期的に発信しており啓発・浸透に大きな成果を上げています。



コンプライアンス研修の様子

Voice



クミアイ化学工業生産資材本部資材調達部 部長 中山 正

調達部門は、原材料等の購入、輸入を主業務としていますが、当然さまざまな法令に規制されています。たとえば下請法や関税法等幅広くあり、そのすべてを遵守していかなければ、当社の生産・販売活動は停止してしまいます。当社の行動規範も厳守しながら、購入先と良好な信頼関係を築いていき、その成果として安価・安定調達につなげて会社の発展に貢献しております。



安全・環境

クミアイ化学工業は、農薬を製造する化学メーカーとして、工場において万一の事故や自然災害の発生時に社員の安全・安心を守り、周辺地域に影響を及ぼさないように、安全教育と防災訓練による安全活動を推進しています。また、あらゆる業務活動に際して環境負荷の軽減と環境汚染の予防に注力しています。



保安・安全

静岡工場での保安・安全活動

静岡工場では従業員への安全教育として年1回「安全大会」を行い、安全に関する講演や設備説明会を実施しています。また、プラント対抗の失敗語録やKYT（危険予知訓練）イラストシートを作成するなど趣向を凝らしたプログラムも取り入れています。「安全大会」で寄せられた現場の意見をもとに今後の対策などについて検討する安全操業会議を毎月、運営しています。この他、製造に関わるリスクアセスメント、使用する化学物質の危険性、万一の時の対応等を周知徹底する目的で、製造開始前に行う生産前教育も実践しています。

工場における安全診断として外部のコンサルタントに委託し、内部の従業員には気づきにくいリスクの抽出を行っています。これによりレベルの高い改善につながった事案もあり、他の工場でも導入を始めています。

静岡工場では、各プラントに「ヒヤリハットノート」を設置し、担当者が気づいた小さなリスクを現場報告として漏らさず収集する取り組みを実行中です。報告には作業長、課長、工場長がコメントをつけてフィードバックすることで、現場の共有と報告意欲の喚起につながっています。

静岡工場での防災と労働安全衛生



静岡工場における防災活動として、月1回の自衛防災隊各係別の基礎訓練とともに年2回の総合防災訓練（漏洩事故、地震）を実施しています。ここ数年、漏洩事故災害訓練の際には富士市西消防署の参加・協力のもとに実践的な指導を受けています。また、富士市防火協会に加盟し、操法大会や出初式などの行事参加を通じて協力関係を深めています。



従業員の労働安全衛生にも力を入れており、安全衛生年間計画のもとに月例の教育を各部署で実施し、健康の維持と増進を図っています。



総合防災訓練(静岡工場)

本社での防災訓練

本社でも毎年、防災訓練を実施しています。今年度は、自衛消防隊の組織・役割についてDVDで学習し、「通報・消火・避難訓練-実施マニュアル」に従い消防計画と訓練内容について再確認した後、初期消火の段階で重要な「通報」=消防署への電話の仕方について、地元消防署の指導のもと訓練を行いました。

火災時は落ち着いた対応が難しくなり、通報に時間がかかることが想定されます。実際にどのような手順で状況説明するかを体験によって理解する有意義な訓練となりました。さらに実地訓練として、本社ビル屋上で模擬的な消火器を使った消火訓練も実施しています。



本社屋上で行われた防災訓練の様子

Voice



クミアイ化学工業 生産資材本部 技術統括部 安全・品質・環境課 課長 松下 博之

保安安全活動は結果の数値化が難しいため、日々努力されている現場の方々にとって、成果が見えにくいことが悩みの種です。「工場の危険を知ることが、安全な作業につながる」という認識を共有して、従業員やステークホルダーの皆さまの健康と幸せな暮らしを守るべく、「事故の芽を摘む」先取り型の活動をしていきたいと思っています。

Voice



クミアイ化学工業 生産資材本部 生産部 静岡工場 安全環境課 課長 榎原 吉英

総合防災訓練では、漏洩事故などによる発災からの初動対応で何が出来るかを訓練の中に盛り込み、人員の安否確認と公設消防への通報から情報伝達・情報共有を迅速に行う訓練の立案・実施に取り組んでいます。事故だけではなく、大規模地震のような自然災害もあるので、いざという時に「何をすべきか」を知っておくことが大切です。

環境

環境方針に基づく取り組み

クミアイ化学工業は、環境マネジメントシステムを確立・実行し、継続的改善により環境負荷を軽減するという方針のもと、従業員一丸となって地球環境の保全に取り組んでいます。

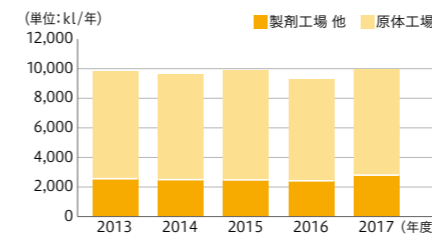
農薬の原体・製剤の生産を業務としている当社は、生産に係わる全ての業務活動の中で、環境への影響が大きいと考えられる以下の項目について継続的な改善を図ることにより、積極的に環境汚染の予防に努めています。

- ①省資源・省エネルギーの推進
- ②3R(Reduce, Reuse, Recycle)の推進
- ③産業廃棄物の削減・適正処理

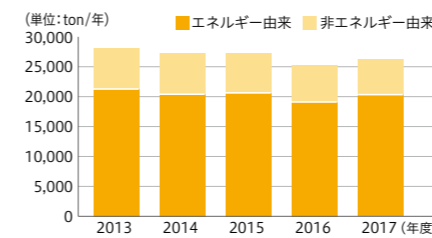
さらに、環境に関連する法規及びその他の要求事項を遵守するとともに、レベルの高い自主基準を設けて、エネルギー使用量やCO₂排出量の維持と改善に注力しています。

特に、PRTR^{*}で定められた第一種指定化学物質の排出・移動量については、2015年度からの3年間で大きく削減できました。^{*}Pollutant Release and Transfer Register: 化学物質排出移動量届出制度

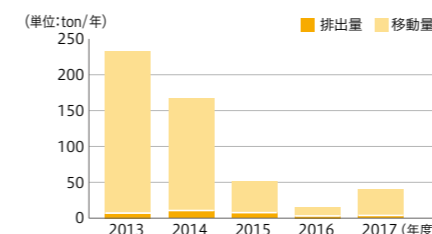
●エネルギー使用量(原単位換算, Kl/年)



●CO₂排出量 (ton/年)



●PRTR第一種指定化学物質の排出・移動量 (ton/年)

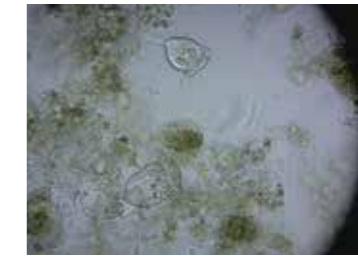


●PRTR 第一種指定化学物質 トップ5

化学物質名	2013~2017年平均 排出・移動量 (ton/年)
①トルエン	48
②クロロベンゼン	27
③N,N-ジメチルホルムアミド	15
④塩化ベンジル	5
⑤塩化メチレン	3

静岡工場における取り組み

工場内で発生する排水中の有機物を細菌や微小動物などの微生物の代謝を利用して約1500m³/日分解処理しています。処理した後に汚泥池で汚泥を沈ませ、きれいになった上澄み水は富士川に放流します。さらに、原体(有効成分)の生産で使用した廃油や廃液は液体焼却炉で焼却処理し無害化します。焼却で発生する排ガス中のCO₂やNO_xも常時監視して、大気汚染物質の基準内で管理しています。



汚泥中の微生物の一部(釣鐘に似ている事から、ツリガネムシと呼ばれています)



排水処理設備

また、生産や保温に使うスチームを管理して省エネに貢献し、LPGから都市ガスへ切り替えた結果、工場からの排出CO₂の削減に成功しました。

Voice



クミアイ化学工業 生産資材本部 生産部 静岡工場 製造1課 第15部門 作業長 熊王 智明

工場内の施設や機器の保全管理を徹底することは、事故やトラブルを防いで環境を守るための基本です。そのため毎日24時間、通常通りに設備が稼働して使用できる状態を維持することに全力を尽くしています。水の色や音、温度、圧力、pHなど、ほんのわずかな変化を見逃さずに、大事に至る前に対処するのが、私たち15部門の使命です。



消費者課題

私たちクミアイ化学工業が製品やサービスを通じて持続可能な社会の実現に貢献するためには、お客様からの理解と支持が欠かせません。お客様が抱えている課題の解決をサポートするためにコミュニケーションの機会を増やし、安心して製品をお使いいただくための情報提供に力を注いでいます。



製品説明を徹底することで 農薬の適正使用に努めている

私たちクミアイ化学工業が開発・製造している製品について、お客様が納得して選択していただけるように、また、正しい使い方をいつでも確認していただけるようにホームページで詳細情報を提供しています。SDS（製品安全データシート）や最新の適用拡大情報などの基本情報に加えて、実際に製品を利用されているお客様の声を「クミカWebレポート」として掲載し、安心してお使いいただけるように努めています。ホームページにとどまらず「クミカ 農薬の解説書」を配布して製品に関する情報の理解・浸透を図っています。

また、全国をカバーする国内営業の支店で製品の販売担当者、普及担当者が、地域ごとの特性や課題に合わせた製品の提案と、その特性や注意事項、使い方等についてお客様に的確なアドバイスができるように、知識とスキルを蓄えています。

その全国の販売担当者、普及担当者を介してお客様に直接



クミカWebレポート



クミカ農薬の解説書

Voice



クミアイ化学工業 国内営業本部 企画普及部 普及課 中四国支店駐在 (お客様窓口担当) 岡野 光晴

お客様は製品購入後、分からないことがあると製品ラベルのフリーコールに電話をお掛けになるので、当社ではできる限りすべての製品にフリーコールを記載するよう努めています。問い合わせ内容はさまざまです。農薬の使用方法から、効果についてのご質問、残留、適用外作物へのドリフト、薬害など安全性に関する内容もあります。お電話では丁寧にゆっくり話すよう心がけています。不確かなことや、うる覚えの内容は、一旦電話を切り、正確な情報を確認してから、折り返して対応します。

製品説明を行うことが、農薬の適正使用につながっています。

製品の適正使用の取り組み例 水稻除草剤の上手な使い方

クミアイ化学工業の主力製品である水稻除草剤の効果安定、薬害防止のためには適切な圃場管理が重要になります。

そのため、クミアイ化学工業では、除草剤の効果が高まるようにホームページに「安定した除草剤処理層を作るための重要なポイント」というコンテンツ

を設けて、圃場管理のポイントを解説しています。



「安定した除草剤処理層を作るための重要なポイント」

病害虫発生予察情報で 病害虫対策をサポート

クミアイ化学工業は、作物の病気や害虫被害のリスクに備えるお客様方をサポートするために、水稻や野菜、果樹などの農産物に被害を与える病気や害虫などの発生状況に関し、都道府県から発表される病害虫発生予察情報の警報・注意報・特殊報の発令状況をホームページで開示しています。

発表後6週間以内の情報を掲載し、都道府県ごとに警報・注意報・特殊報の発令状況を地図で表示し、近隣の状況もひと目でわかるようにしました。各都道府県による発令内容の詳細ページや、病害虫に対応する当社製品へもリンクさせているので、迅速に対策が取れるように工夫しております。



「病害虫発生予察情報」



コミュニティへの参画・発展

クミアイ化学工業は、良き企業市民としてコミュニティとの関わりを尊重し、その発展に寄与しています。お客様や株主・投資家などのステークホルダーをはじめ、さまざまな共同体と積極的にコミュニケーションを図り、本業を通じた社会貢献活動への参画や地域社会との交流を推進しています。



株主・投資家への 情報開示の取り組み

私たちクミアイ化学工業は、株主・投資家の皆さまに財務状況や経営戦略などに関する情報を適時、正確かつ公平に提供し、その内容を的確に理解していただくように努め、当社に対する信頼と株式市場からの正当な評価を得ることを目指しています。経営トップの意思を反映した組織的なIR体制を構築し、株主通信（事業報告書）や決算説明会資料、有価証券報告書などのIRツールの充実による積極的な情報開示を実践しています。

さらに、東京証券取引所が提供する適時開示伝達システム(TDnet)への登録やWebのIRコンテンツを活用することにより、国内のみならず海外のステークホルダーの皆さまへの情報開示にも十分配慮しています。



株主通信(事業報告書)



次世代教育と農業支援につなげる 「学生懸賞論文募集」

長い歴史の中で、農業はさまざまな人々のアイデアと研究の成果によって発展し、現代では育種技術の向上や化学農薬の登場により、農作物の生産性は飛躍的に向上しました。いま、増え続ける人口や地球環境の変化に対応するため、世界各国において、さまざまな施策のもとに、異分野と融合した技術開発が行われ、農業は新たな革新の時代を迎えています。

私たちクミアイ化学工業は、若い世代から未来の農業に対する夢にあふれた自由で大胆なアイデアや提言を募る「学生懸賞論文」を毎年実施しています。この懸賞論文は「農業の未来」をテーマに、大学生、大学院



第7回学生懸賞論文募集ポスター

生および農業大学の学生を対象として2012年にスタートしました。農業に関心をもつ若者を増やして、次世代の農業を担う人材育成を支援する取り組みとして、今後も論文の募集を続けていきます。

どんぐりプロジェクト®への参画で 宮城県の防災林再生に貢献

東日本大震災で被災した宮城県には、販売拠点の「東北支店」、生産拠点の「小牛田工場」および研究施設の「東北防除技術研究室」があり、当社との関わりが深い地域です。震災復興支援の一環として、震災により大きな影響を受けた県内の海岸防災林再生に貢献することを目的とした「どんぐりプロジェクト®」を全社的に立ち上げました。

このプロジェクトは、宮城県内で収集したどんぐりを苗木にまで育て、海岸防災林として植樹するものです。地域の皆さまにご協力いただくことで集まったどんぐりは、当社の研究所でポットに植え付けて苗木へと育成し、宮城県内の従業員およびその家族が主体となって植樹を行いました。

当社は宮城県の豊かな自然環境のために、県民の皆様と協力しながら、本プロジェクトを継続していきます。

*「どんぐりプロジェクト®」は東京ガス(株)の登録商標です。



ポットに種を植え付けて苗木を育成



Voice



特定非営利活動法人 宮城県森林インストラクター協会 会長 高橋 孝紀様

2016年から「クミカの森」の植樹のお手伝いをさせていただいております。海岸では防潮・防風の盾になるクロマツに比べると、コナラには厳しい生育環境のようですが、「どんぐりプロジェクト®」で育てられ植樹されたコナラには、その一連の流れの中で、さまざまな人が関わりあい、その思いが植樹した苗に引き継がれ、ひたむきに根づこうとしております。このコナラが、将来復興エリアの憩いの場になるものと成長を見守っております。